

(12)

氏名(生年月日)	スグ 勝	ロ 呂	ヤヨ 弥	イ 生
本籍				
学位の種類	医学博士			
学位授与の番号	乙第826号			
学位授与の日付	昭和62年6月19日			
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当(博士の学位論文提出者)			
学位論文題目	癥痕肝の臨床的検討 —特にその成立機序に関する考察—			
論文審査委員	(主査) 教授 小幡 裕 (副査) 教授 羽生富士夫, 教授 白坂 龍曠			

## 論文内容の要旨

### 目的

癥痕肝は Kalk により名称づけられた重症肝炎経過中にみられる肉眼的所見である。今回は腹腔鏡下に癥痕肝を認めた症例について、その臨床像と形態を検討し、肝表面の癥痕および再生結節の局在性からその形成機序を考察した。

### 対象および方法

腹腔鏡を施行した2,000例のなかから癥痕肝30例(1.5%)を対象とし、これらを次の2群に分けた。すなわち、狭義の癥痕肝(肝表面に肉眼的に肝硬変様小結節を認めないもの)7例および混合型癥痕肝(肝硬変様小結節をびまん性に認めるもの)23例である。これらについて病因、臨床症状、予後および照視しうる肝表面上に癥痕・結節が観察される局在部位の頻度を検討した。

### 結果

1) 癥痕肝の病因別頻度は、肝ウイルス(非A非B型)2.2%、アルコール性4.3%、自己免疫性21.1%で、自己免疫性に高率であり肝炎ウイルス(B型)ではみられなかった。

2) 急性肝壊死から進展したと思われる狭義の癥痕肝7例では、黄疸の発現等から急性発症の時期が推定されるのは2例のみであった。予後は2例において肝機能検査所見が正常化し、他の例も進行性の所見は認められなかった。

3) 慢性肝障害から進展したと思われる混合型癥痕肝23例では、臨床症状および検査成績の面から経過中

急性増悪の存在が推測された。予後は全例肝硬変の経過をたどり、6例に肝細胞癌の併発をみた。

4) 照視可能な肝表面を肝内門脈走行に一致するように9区域に分け、癥痕・結節の出現頻度を比較した。その結果、癥痕は辺縁にみられ左葉内側区域(57%)、右葉前下区域(43%)、左葉外側区域(37%)の順に多く、結節は右葉前下区域(57%)、右葉前上区域(27%)に多く認められた。また47%の症例には Cantlie 線上に溝状、索状癥痕が存在した。

### 考察

癥痕肝の形成は病因別に異なった頻度であり、急性期および急性増悪期における肝壊死の発生状況の差異を反映しているものとみなされる。さらに癥痕の多くみられる肝辺縁部は血液循環の末梢にあたり解剖学的に血流の乏しい部分と推定され、同じく溝状、索状癥痕が多数認められた Cantlie 線付近は血管分布境界域に一致しており、いずれも血流因子の関与が示唆された。一方結節については、解剖学的に圧迫の少ない部位に多くみられるのみでなく右葉前区域に多く、門脈走行状況の差異に基づくものと推測された。

### 結語

癥痕肝の形成は一次性因子として病因、二次性因子として血流の状況が関与するものと考えられる。

## 論文審査の要旨

本論文は Kalk が腹腔鏡下に観察した高度肝壊死の修復過程にみられる癒痕肝について、その成立機序を検討したものである。一次性因子として、ウイルス性、自己免疫性などの病因、二次性因子として血流状況の関与によるとの結論が得られた。

学術上価値ある論文と認める。

### 主論文公表誌

#### 癒痕肝の臨床的検討

—特にその成立機序に関する考察—

Gastroenterological Endoscopy 第28巻  
第11号 2529～2538頁（昭和61年11月20日発行）

### 副論文公表誌

- 1) 臍石症と糖尿病を合併した副甲状腺機能亢進症の1例  
糖尿病 27 (1) 81～86 (1984)
- 2) 成人病定期検診における胃潰瘍の臨床的検討—再発を中心に—  
東女医大誌 55 (3) 330～335 (1985)

- 3) ラット Cysteamine 十二指腸潰瘍の発生機序について  
東女医大誌 56 (8) 668～676 (1986)
- 4) 十二指腸粘膜における  $\text{HCO}_3^-$  分泌—第2報：Cysteamine 潰瘍の内視鏡的観察と  $\text{HCO}_3^-$  濃度および血流動態—  
Progress of Digestive Endoscopy 25 (12) 122～124 (1984)
- 5) 早期食道癌の4例  
Endoscopic Forum 1 (1) 35～39 (1985)